

本年度の重点	1	自信、責任感を育てる教育活動
目標（評価規準）	児童が自ら進んで行動する、発言をする機会が増える。	
重点に係る現状 設定理由	学級の児童数が少ない本校の環境は、教師が児童に手厚い指導を行える利点がある反面、とすると先回りしすぎて児童が悩む機会や試行錯誤する機会を少なくすることにもつながる。 少人数だからこそできる児童との距離感や支援のあり方を改善し、児童が自ら考えそのうえで行動する機会を豊富に作ることで、自信や責任感を育てていきたい。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・本年度は、新型コロナウイルス感染症対策により児童が発表をする機会、人前に出る機会が例年より少なかった。職員の感触としては、できなかったことで子どもの成長にこのような機会がどれだけ大切なのかを改めて感じた。 ・そのような中でも少人数であることを活かして運動会や発表会に保護者を招いて実施することができ、その点では児童が自分の行動に対する自信や責任感を感じる機会を作ることができよかった。 ・授業については、グループ活動や話し合い活動を十分に行うことができなかった。このことによる児童の自主性や自信を育てる指導に課題が残った。
各アンケート等の結果	・保護者からは、本校の取り組みに概ね肯定的なご意見をいただいた。特に感染対策を含めた工夫による行事の実施には良い評価をいただいた。 ・一方で地域、保護者の方々が来校できる機会を制限したことで、日常の児童の様子がわかりにくいとのご意見もいただいている。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○少人数であるために学年間の交流中止が児童の表現力や判断力、自信や責任感に与えている影響は少ないことがわかった。 ○一方で、個人対応の活動が増えたことにより、これまで児童に見られた他への依存が改善された面があった。個別の対応による児童の自信や責任感の育成の視点も重視していく必要がある。 ○児童の交流が難しいことの対応策として教員が授業交換を行ったことは閉塞感を解消する手立てとして有効であった。学級を複数の教員が指導する学校体制について研究を進める必要がある。 ○授業中に児童が活動する場面の多くが制限されていたが、その中でも主体的に発言したり会話したりする時間や場の確保は重要であり、活動を体験させるための工夫が必要である。
学校関係者評価結果	・難しい状況の中で子どもたちが学びを深めている様子が伝わった。 ・子どもたちが楽しそうに学校に通っている様子が伝わってくる。
最終改善方策	○難しい状況の中でも、児童が学年を越えた交流を行う機会を創出する。 ○児童の自信や責任感の育成の視点を重視し、意図的に個人の自覚や行動を促す機会を増やす。 ○複数の教員が児童に関わる体制をつくり、児童の学びや生活に多面的に対応する。 ○困難な状況の中でも、授業の中で児童が主体的に発言したり会話したりする時間や場の確保は重要であり、その工夫改善を図る。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	学びに向かう姿勢の育成
目標（評価規準）	日常の児童の学習に対する態度、アンケートや感想、つぶやき	
重点に係る現状 設定理由	本校の児童は、全体的に基礎基本の定着は徐々に図られてきてはいるものの、応用する力に課題がある。覚えることを中心にした学びから脱却し、学びの楽しさ、社会や生活とのつながりなど意欲をベースにした学習に大きく転換させていきたい。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・個別の学びに向かう姿勢は保つことができていた。児童によっては、探求を深める意欲を見せていた。 ・講義型の授業が多くなり、児童が主体的に活動する割合が少なかった。 ・話し合い活動やグループ活動の制限から、他者の意見を取り入れての刺激や変容、考え方の広がりには課題が残った。 ・指導内容と授業のペースのバランスに苦慮し、十分な思考を促すことが難しかった面があった。
各アンケート等の結果	・児童アンケートからは、概ね前向きな学習への姿勢が感じられるものの、授業内容の理解に苦しんでいる児童の割合が若干増加している様子が見られる。 ・保護者アンケートからは、児童は意欲的に学習に取り組んでいる旨の回答が多かった。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○臨時休校期間の影響により授業時間を十分に確保することができなかった。 ○コロナウィルス対応をとりながらの授業には制限が多く苦慮した。 ○年間を見とおした各学年各教科の再計画により、本年度中に行う授業をほぼ実施することができた。 ○制限が多い中での授業づくりにはより工夫が必要であった。 ○児童に育てる力とその方法について、制限の中での授業の工夫、実践について職員全体で共通認識を図る必要がある。 ○授業を進めることが困難な状況だからこそ学力定着の必要性について再認識できた。学力の定着を軸にした授業のあり方について研究を進める必要がある。
学校関係者評価結果	学校は厳しい状況の中で、工夫して授業を行っている。 少人数を活かした工夫を更に進めてもらいたい。
最終改善方策	○制限がある中でも、確実に学力が定着していく授業の考え方や方法について職員全体で共通理解を図る。 ○工夫した授業実践、その成果、児童の状況について職員全体で共有し全体の指導力底上げにつなげる。 ○授業交換等を実践し、指導の複線化を図ると共に複数教員による児童の把握を行い、意欲や学びの充実感の向上につなげる。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	意欲につながる評価
目標（評価規準）	児童の学校生活に対する態度、アンケートや感想、つぶやき	
重点に係る現状 設定理由	教師からの声かけや励ましにより、自信のなさや苦手意識を持った児童が、学習や生活に意欲をもって粘り強く取り組めるようになるような、結果だけではなく過程に目を向けた評価をする力を学校として高めていきたい。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・概ね全職員共通認識のもと児童の評価にあたることができている。 ・コロナウイルス感染対策により、実施できなかった活動があったことで、教育活動が児童の意欲とどのように関連するかについて改めて考える機会となった。 ・今年状況を踏まえ、行う教育活動の意図や目的を明確にして、その評価も含め見直しを進める必要がある。
各アンケート等の結果	・児童アンケート、保護者アンケート共に全体的に取り組みに対して肯定的なご意見をいただいている。 ・保護者アンケートから、善悪の判断を子どもに学ばせてもらいたい旨の要望を一部いただいている。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○学習評価について研修会を行うことができたことは、全職員が共通認識を持つ上で効果があった。 ○日常の児童の行動や活動に対する評価（声掛けを含む）のタイミングや内容に課題が残るケースが見受けられた。 ○評価を行うために、改めて何を指導するかの共通認識が必要であり、指導内容や指導方法の改善をめざした取り組みが重要である。 ○他学年の教員が指導に入る体制をとったことで、児童の重層性が生まれるとともに評価の視野が広がり児童の安心感につながった。また、一人の児童について複数の教員が意見交換する場面が増え、指導が活性化された。
学校関係者評価結果	・引き続きあたたかい目で子どもたちを励ましてもらいたい。 ・教師の言葉は、子どもの心に残る。子どもを育てる声かけをお願いしたい。
最終改善方策	○継続して評価について研修会を行う。 ○複数教員による指導体制を継続し、児童への評価が偏ったものにならないようにする。 ○全職員による研鑽の中で職員一人ひとりの指導力を高めていく。 ○評価を行う前提となる何を育てどこを見るのかについて改めて全職員で研修を深める。